

認識のモダリティ形式としての「カト思ウ」

—— 語用論の観点から ——

國 澤 里 美

“-ka to omou” as an Epistemic Modality:
From a Pragmatic Perspective

Satomi KUNISAWA

1. はじめに

私たちは確信を持って断言できるはずの場面であってもあえて言い切らないことがある。例えば、(1) はカメラの周辺機器（カメラホルダー）の商品レビューであるが、「強くおすすめします」と続くように、話し手¹はこの商品に購入価値を見出しており、(2) のように断言できるはずである。しかし、それにも関わらず (1) において「カト思ウ」が婉曲的に使われている。

- (1) 少なくとも一眼を使う方で山歩きをしながらシャッターチャンスを逃したくない方は買ってみる価値があるかと思います。強くおすすめします。

(https://www.amazon.co.jp/gp/customer-reviews/R1150J16395VYT?ref_=fsper_pl_sr_3_5_7_675636011) 2020/09/20

- (2) 買ってみる価値があります。強くおすすめします。

従来「カト思ウ」は「ト思ウ」の一部として扱われ、「カト思ウ」に焦点を当てた考察は特にされてこなかった。確かに (1) は (3) に言い換えられるように、「カト思ウ」と「ト思ウ」は同じ文脈で使える場合がある。

- (3) 買ってみる価値があると思います。強くおすすめします。

一方、「カト思ウ」と「ト思ウ」が異なる使い方をする場合も確認できる。(4a) のように「カト思ウ」を用いた文は自然であるのに対し、(4b) のように「ト思ウ」を用いた文は不自然である。また、(5a) のように「カト思ウ」を用いると非文となるのに対し、(5b) のように「ト思ウ」を使うと自然な文となる。

- (4) (プレゼンで) 以上、お分かりいただけました {a. かと思います／b. ??とと思います}。
(5) (パーティーで) それでは、乾杯したい {a. *かと思います／b. とと思います}。

1 本稿における「話し手」とは、発話者だけでなく書き手を含む情報発信者を指す。また、「聞き手」とは、読み手を含む情報受信者を指す。

従来「ト思ウ」の中に位置づけられてきた「カト思ウ」であるが、(4) (5) のように「ト思ウ」とは使用条件に違いが見られる場合がある。結論を先取りして述べると、両形式は配慮の対象に違いがあり、これが使用場面の差に表れると考えられる。「カト思ウ」が用いられる条件やその機能を明らかにすることはコミュニケーションにおける配慮のあり方を探る手がかりとなるだろう。若者ことばを中心に、いわゆる「ぼかし表現」の多様化が指摘されているが（佐竹 1995、1997など）、若者ことばに限らず様々な婉曲的な表現が見られる。本稿は「カト思ウ」も婉曲の1つとして用いられる場合があると考え、語用論の観点から考察する。

2. 先行研究および本稿の立場

人は事態を確実なものとして捉える場合と不確実なものとして捉える場合があり、その表現方法は異なる。² 例えば、ある商品の価値を確信していれば「買う価値があるφ」のように断定の形で言い切れ、確信していなければ「買う価値がある {だろう (でしょう) / と思ウ」のように述べる。本稿では、このような話し手が事態をどのように認識しているかを表す形式を「認識のモダリティ形式」と呼び、「カト思ウ」はその1つであると考え。2.1では「カト思ウ」には命題として使われる場合とモダリティ化して使われる場合があることを確認し、本稿の考察対象を示す。2.2では「カト思ウ」の意味と用法を確認する。2.3では婉曲の「カト思ウ」を考察する際に用いる語用論の概念を確認し、本稿の立場を述べる。

2.1 モダリティ化した「ト思ウ」

思考動詞「思う」を含む「ト思ウ」は、本動詞として使われる場合と本動詞の意味が弱まりモダリティ化して使われる場合がある。(6) の「雨が降ると『思うか思わないか』」のように話し手の判断が問われている場合は「思う」という動詞に焦点が置かれている。この場合、「思う」は本動詞として使われており、「ト思ウ」は命題である。一方、(7) の「雨が『降るか降らないか』」のように事態の成立可能性が問われている場合は「雨が降る」という事態に焦点が置かれている。この場合、「ト思ウ」は本動詞の意味が弱まり、モダリティ化している。

- (6) A：明日、雨が降ると思う？思わない？
B：降ると思ウ。(命題)
- (7) A：明日の天気はどうか？
B：雨が降ると思ウ。(モダリティ)

仁田 (1991)、澤田 (1993) は「ト思ウ」が文末モダリティ化する条件として「非過去、非否定、『思う』の一人称主体の省略」の3つを挙げている。本稿は「カト思ウ」がモダリティ化する場合もこれら3つの要素を含んでいると考え、この条件に当てはまる「カト思ウ」を考察の対象とする。³

-
- 2 寺村 (1984) は「あるコトを確かな現実の事実として述べる」場合を「確言」と呼び、「確言はできないが、自分の過去の経験、現在もっている知識、情報から、概ねこうであろうと述べる」場合を「概言」と呼んでいる。
- 3 「～のではないかと思う」「～ようかと思う」のような表現は、ノデハナイカ、ヨウカというモダリティ形式を含む引用節の一部であり、認識のモダリティ形式として捉えがたい。これらの表現は本稿の考察対象外とする。

2.2 「カト思ウ」の意味と用法

事態は客観的な事実である「現実世界」と、話し手の頭の中である「非現実世界」に分けられ、さらに「非現実世界」は話し手にとって事態が不確実か確実かによって分けられる。話し手にとって事態が「不確実」である場合には推量用法として使われ、話し手にとって事態が「確実」である場合には婉曲用法として使われる。國澤 (2014) では「ト思ウ」について次のように考えた。

「ト思ウ」：話し手の頭の中で事態が成立していることを表す形式

(推量)：現実世界では不確実なことであっても、話し手の頭の中では事態が成立していることを表す用法

(婉曲)：話し手にとって確実な事態について断定の形で言い切らず、あえて話し手個人の思考内容であるということを表す用法

本稿3節でもこの事態の確実性という基準を用いて「カト思ウ」を推量と婉曲に分けて見ていく。ここでは「カ」の機能を確認し、「カト思ウ」の意味・用法について述べる。益岡 (2007) はしばしば疑問を表す助詞とされる「カ」について、「カ」の多義性から疑問を表す助詞という捉え方には無理があると述べ、『不定性』を表す助詞 (標識) であり、疑問は不定性の現れの1つである」としている。さらに、「カ」が不定真偽判断を表す、すなわち真偽の判断が下せない状況であるのは、「当該の事態がまだ現実のものとして捉えられていないということ、すなわち非現実 (irrealis) の領域」にあるとし、これが不定性につながっていると述べている。本稿では「カト思ウ」について、「カ」の不定性を含むことで命題内容が1つに絞り切れていないことを表していると捉え、次のように考える。

「カト思ウ」：話し手の頭の中で事態が成立していることを表すが、命題内容を1つに絞り切れておらず、他の命題内容の存在も否定しないことを表す形式

(推量)：話し手の頭の中で不定性を残しつつも事態が成立していることを表す用法

(婉曲)：話し手にとって確実な事態について断定の形で言い切らず、あえて話し手個人の思考内容であるということを表す用法。ただし、他の命題内容の存在も否定しない

本稿は「カト思ウ」にも推量と婉曲の用法があると考え、上記のように仮定する。具体的な用例の考察は3節で行うこととし、次に婉曲と語用論の接点について確認する。

2.3 「カト思ウ」とポライトネス理論

本稿は、婉曲的な表現を考察するには対人コミュニケーションに関する理論や概念を用いて語用論の観点から捉えることが有効であると考え。Brown & Levinson (1987) は、人はだれでも社会生活を営む上で他者との人間関係に関わる基本的欲求を持っており、それには「ネガティブ・フェイス」という他者に邪魔されたくないという欲求と、「ポジティブ・フェイス」という他者に好ましく思われたいという欲求の2種類があるとしている。さらに、これらのフェイスを侵害する可能性のある行為を「FTA (フェイス侵害行為: face-threatening acts)」と呼んでいる。

フェイスには話し手のフェイスと聞き手のフェイスがあることは知られているが、これまでの研究は、依頼、提案、申し出のような「聞き手のフェイス」を侵害する場合が中心であったように思われる。例えば、〈依頼〉は相手に負担をかけることになり、他者に邪魔されたくないという聞き手のネガティブ・フェイスを侵害し、〈依頼の断り〉は依頼者の期待に応えないことになり、他者

に好かれたいという依頼された側のポジティブ・フェイスを侵害するというものである。これに対し本稿では、「話し手のフェイス」を侵害する行為に対するストラテジーにも注目したい。1節で触れた婉曲的な(4a)は話し手と聞き手、双方のフェイス侵害リスクを回避していると考えられる。また、後述するように「カト思ウ」には主に話し手のフェイス侵害行為へのストラテジーとして使われる場合もある。FTAに対するストラテジーとして用いられる婉曲表現について、本稿は従来考察が進められてきた聞き手のフェイス侵害だけでなく、話し手のフェイス侵害の場合も含めて見ていく。

文末の「ト思ウ」を語用論の観点から捉え、これにポライトネス的機能を認めたものに滝浦(2015)があり、(8)を直訳した(9a)は意味をなさず、(9b)のような訳が適切であると述べている。

(8) それでは報告会を始めたいと思います。(滝浦 2015:例30、下線は引用者による)

(9) a. #So, I think I want to start our briefing session. (同:例31a)

b. It's time to start our briefing session. (同:例31b)

滝浦は(8=例30)について、「ト思ウ」を用いる動機として「行為の遂行者たる自分の存在を小さくすることで、聴衆に対する敬避的なポライトネスを表す」ことを指摘している。本稿はBrown & LevinsonのFTAに対するストラテジーの観点から解釈する。本稿では(8)の「ト思ウ」は、踏み込まれたくないという聞き手のネガティブ・フェイス侵害のリスクと、好ましく思われたいという話し手のポジティブ・フェイス侵害のリスクを回避するために機能していると考えられる。これについては4節で詳述する。

以上、「カト思ウ」を1つのまとまりある認識のモダリティ形式として捉える本稿の立場を述べた。従来モダリティ研究は推量用法を中心に考察されてきたが、婉曲用法も含めて考察することでモダリティ形式を包括的に説明できる。この婉曲用法を考察するには、話し手が他者とどう関わるのかという対人コミュニケーションに着目し、語用論的な観点を用いることが有効である。3節では、まず事態の確実性という基準によって「カト思ウ」を推量と婉曲を分け、それぞれの用例を確認する。次に婉曲において「カト思ウ」がFTAに対するストラテジーとしてどのように機能しているのかを見る。

3. 「カト思ウ」

3.1 推量用法

「カト思ウ」は、(10)~(12)のように話し手にとって命題内容が不確実な場合には推量として用いられる。(10)は未確認の事柄、(11)は確信が持てない記憶、(12)は聞き手の心身の状態であり、これらは全て話し手にとって不確実な命題内容である。

(10) これらの田舎に対立する浜はおそらくは船附場の町屋あるいは漁民部落であろう。たとい幾分か農業を営むとしても、経営の様式がよほど田舎の方とは違っていたかかと思う。(BCCWJ 書籍 LBe3_00062)⁴

4 現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJ)からの用例である。

(11) この詩は、比較的新しいものと記憶している。たぶん、五年ほどまえの作品かと思う。

(BCCWJ 書籍 LBa9_00115)

(12) 4月、5月と駆け抜けてきて心も身体もそろそろ疲れが出ている頃かと思います。そろそろ夏に向けて自分の状態をハーブを通して振り返ってみてはいかがでしょうか？

(<http://www.littlewonders-herb.com/category/topics/>) 2020/09/20

(10) は経営様式について未確認の部分もあるが、おそらく田舎の方とは違っていたと推し量っている。(11) は比較的新しい詩であるということまでは記憶があるが、具体的な年数までは確信が持てないという場合である。(12) はハーブ店の HP からの実例であるが、客の心や身体の状態を推し量りながら商品をすすめている。(10)～(12) は、①客観的な事柄、②話し手自身に関する内容、③聞き手に関する内容であるが、いずれも話し手にとって命題内容が不確実な場合であり、この場合「カト思ウ」は推量として用いられる。

3.2 婉曲用法

話し手にとって命題内容が確実な場合、「カト思ウ」は婉曲として用いられる。3.1で見た①客観的な事柄、②話し手自身に関する内容、③聞き手に関する内容の順に見ていく。

①客観的な事柄について述べる場合

話し手が確信を持って自身の認識を述べる場合、断定の形で言い切れる。しかし、それにも関わらず (13) (14) において「カト思ウ」が婉曲として用いられている。

(13) だが一般的には、人間の博打本能を翻弄するオークションの物凄い怖さを改めて痛感させられただけに、入札者は余程の自信なき限り事前に信頼せる画商に相談する姿が大切かと思う。(BCCWJ 書籍 PB47_00195)

(14) 人間は間違いを犯すものであるから、医師の間で、レジデントとスタッフの間で処方ダブルチェック、トリプルチェックする。投与量はこれでよいか、先週投与したばかりなのにまた投与してよいかなど、看護師からチェックがかかることも必要になるかと思う。(BCCWJ 雑誌 PM26_00013)

(13) はオークションという事柄について「相談する姿が大切」であると述べ、(14) はミスを防止するために看護師からのチェックが「必要になる」と述べている。どちらも話し手自身の意見を述べる場面であり、断定の形で言い切れるはずである。しかし、聞き手が自分と異なる考えを持つことで意見の不一致が生じる可能性や、話し手が事実を誤認識した場合に自分の評価が下がる可能性があることを予測し、反論や非難を受けるリスクを回避するために「カト思ウ」を用いていると考えられる。「カト思ウ」を用いることで命題内容を1つに絞らず他の命題内容が存在する可能性を残している。本稿は (13) (14) において、聞き手のフェイスを侵害するリスクもないわけではないが、話し手のポジティブ・フェイスを侵害するリスクのほうが大きいと解釈し、主にそのFTAを回避するために「カト思ウ」が用いられていると考える。

次の (15) のように、客観的な事柄について専門家として助言が求められている場合も、専門知識を持っている話し手は断定できるはずであるが「カト思ウ」が用いられている。

(15) 同じような意味のことを伝える場合でも、類義語を使うことで表現の仕方に幅をもたせる

ことができます。また似通った別の言葉や表現を使うことで、微妙に違った印象を与えることができるので、意識して使い分けてみるとよいかと思えます。

(<https://kotonoha-jiten.com/blog/thesaurus/>) 2019/03/07

(15) は言葉の使い分けに関する HP の用例であり、話し手は言語の専門家としての立場から「使い分けてみるとよい」と助言している。話し手の知識が多いことは明らかで、この HP の読者が専門家の意見に期待していることが予想される場面で「カト思ウ」が用いられている。これは相手に好ましく思われたいという話し手のポジティブ・フェイスを侵害するリスクを回避するためであると考えられる。1つの命題内容のみを提示して助言することは分かりやすさとともに、押し付けの印象を与えかねない。話し手は「カト思ウ」を用いてこのリスクを回避していると考えられる。(15) は専門家とその意見を求めている読者という関係上、聞き手のフェイスよりも話し手のフェイスが関わっていると考えerほうがよいだろう。このように、客観的な命題内容である場合、特に話し手が知識や情報を多く持っている場合に用いられる「カト思ウ」は、話し手のポジティブ・フェイス侵害を回避する戦略として機能している。

②話し手自身について述べる場合

自分自身についてはよく知っているはずで話し手にとって命題内容は確実である。しかし、(16)(17)において話し手は断定せずに「カト思ウ」を用いている。

(16) ぼくの場合、現代音楽と呼ばれる作品のなかには、本能的に拒否反応が働いたりするものがあります。生理的に受けつけない。正直に言えば、どちらかという、受けつけない作品のほうが多かったかと思う。(BCCWJ 書籍 LBs7_00060)

(17) こうしてやってきた2年半でブログへの姿勢が自分なりに整理できたかと思う。(BCCWJ Yahoo! ブログ OY13_00272)

(16) において話し手はある音楽について「(生理的に)受けつけない作品のほうが多かった」と自分の好みを述べており、(17) では過去の自分を振り返って「自分なりに整理できた」と評価している。(16)(17) も言い切れるはずである。しかし、自分の好みや自己評価が聞き手に受け入れられない可能性は潜在的に存在する。話し手は相手との意見の相違による対人関係の衝突や摩擦、すなわち FTA が生じるリスクをあらかじめ回避していると考えられる。この場合、話し手が自身のフェイスを侵害されることを防ぐ自己防衛となる。

自己評価が高く、他者からの評価とずれてしまう場合、話し手は「生意気だ」「うぬぼれている」のような否定的な印象を持たれるリスクを負う。(17) は話し手が自身について肯定的評価を述べる場合である。「自分なりに整理できた」と言い切れるにも関わらずあえて「カト思ウ」を用いることで、「整理できていない(部分がある)」という可能性を残し謙遜している。(17) における「整理できた」という肯定的評価を「整理できなかった」という否定的評価に置き換えた(17')は非文となる。

(17)' * こうしてやってきた2年半でブログへの姿勢が自分なりに整理できなかつたかと思う。

(17) のように自身について高評価を述べる場合は、そうではない命題内容、すなわち低評価の可能性があることも示すことで謙遜しているのに対し、(17') のように自己評価が否定的である場面

では「カト思ウ」を使うと無責任な印象になる。(17')において話し手は自己を低く評価し、反省を示している。この場合、話し手のポジティブ・フェイスは既に損なわれており、「カト思ウ」を用いて改めてフェイス侵害リスクを回避する必要はない。このように、話し手が自分自身について述べる場合に用いられる「カト思ウ」は、話し手のポジティブ・フェイス侵害を回避するストラテジーとして機能している。

③聞き手について述べる場合

(18) (19)において話し手は命題内容に確信を持っているが、聞き手の理解度や認識が影響することから断定を避けて「カト思ウ」を用いている。

(18) ここでは、そうしたハムについて紹介しよう。ページ数の関係で、それらの特徴に富んだ味わいや、意外なエピソードにあふれた来歴の数々を紹介することはできないが、世界にはいかにたくさんの種類の製品があり、好んで食べられていることはおわかりいただけるかと思う。(BCCWJ 書籍 LB16_00004)

(19) 新学期がスタートしてあつという間にもう週末です。実力テストや学び確認テストも終わりとホッと一息ついている頃かと思います。

(<https://www.kobetsu-base.com/blog/52?page=3>) 2020/09/20

(18) は話し手が自分の説明を聞き手が理解したと認識し、話をまとめている場面である。説明の分かりやすさや理解度などを含め、本当に分かったかどうかは聞き手が判断することである。このため、話し手は「カト思ウ」を用いて聞き手のネガティブ・フェイス侵害リスクを回避している。同時に、相手の領域に踏み込みすぎないことで好ましく思われたいという話し手のポジティブ・フェイス侵害リスクも回避している。(19) は学習塾のHPで、塾は塾生のテストの予定は把握しているはずである。テストが終わり、ホッと一息ついている頃であると確信を持っているにも関わらず、「カト思ウ」を用いている。これは踏み込まれたくないという聞き手のネガティブ・フェイスだけでなく、好ましく思われたいという話し手のポジティブ・フェイスの両方が関わる場合である。話し手は聞き手へ配慮やねぎらいを示すことによって、自分自身のフェイス侵害リスクも回避していると考えられる。

以上、「カト思ウ」が婉曲用法として使われる場合について、命題内容が①客観的な事柄、②話し手自身に関する内容、③聞き手に関する内容の3つに分けて考察した。その結果、命題内容によってフェイス侵害リスクを回避する対象が異なることが分かった。①②は主に話し手のポジティブ・フェイスが関わるのに対し、③は話し手のポジティブ・フェイスと聞き手のネガティブ・フェイスの両方が関わる。これら婉曲は先に見た推量とどのように連続しているだろうか。3.3で見る。

3.3 推量用法と婉曲用法の連続性

「カト思ウ」は話し手にとって命題内容が不確実な場合は推量として用いられ、確実な場合は婉曲として用いられるが、推量とも婉曲とも解釈できる場合がある。(20)は①命題内容が客観的な事柄、(21)は②話し手自身に関する内容、(22)は③聞き手に関する内容について述べる場合である。

- (20) 『メイド・イン・ロンドン』の頃はあくまでも「外国のカンパニー」扱いだったのだ。しかしこの三年間、日本をベースにして年間七十～八十公演を続け、多くの観客が来てくれる実績を重ねてきて、カンパニーとしても認知されてきたかかと思う。(BCCWJ 書籍 PB27_00213)
- (21) だが、私たちが日々おこなっている日本語の音声コミュニケーションに対して、読者の興味を少しでもかきたてることができれば、ひとまずこの本の使命は果たせたかかと思う。(BCCWJ 書籍 LBT8_00014)
- (22) (合格通知で) 本学で勉学されるにふさわしい資質をお持ちかかと思います。

(<https://www.italki.com/question/426820>) 2020/09/11

(20) において話し手はあるカンパニーについて「認知されてきた」、(21) において自分の本について「使命は果たせた」、(22) において受験者に対して「ふさわしい資質をお持ち」であると認識している。しかし、それが事実かどうか正確なところは発話時現在には分からない。認知されているとは言えない可能性、使命を果たせていない可能性、ふさわしい資質を持っていない可能性も考えられる。話し手も聞き手も決定的な判断を下せず言い切れないため、おそらくこうであろうと推し量りながら自分の認識を述べるということから (20) ~ (22) は推量と婉曲の両方の性質を持つ例であると言えるだろう。これらは「カト思ウ」の推量用法と婉曲用法の連続性を示す例であり、この2つの用法の連続性を可能にしているのは「カ」の持つ不定性であると考えられる。この不定性については4節で述べる。

4. 「カト思ウ」と「ト思ウ」の違い

先に触れたように、従来「カト思ウ」は「ト思ウ」の一部として扱われてきた。しかし、(4) (5) のように「カト思ウ」と「ト思ウ」は置き換え不可能な場合がある。本節では「ト思ウ」と比較しながら「カト思ウ」の使用条件を確認し、2つの形式に違いが見られる要因について考える。

「ト思ウ」の先駆的な研究に森山(1992)がある。森山は「ト思ウ」の基本的意味を「個人情報の表示」とし、(23) のような「不確実表示用法」だけでなく(24) のような「主観明示用法」があることを指摘している。さらに「主観明示用法」の典型例として(25) (26) を挙げている。

- (23) 「あいつ、大学、来てるかな」「はあ、来てるかと思います。」(森山 1992 : 例5)
- (24) 戦後の正しい教育を受けた若者に正しい判断をしてもらわねばならないかと思います。(同 : 例24)
- (25) 乾杯したいかと思います。(同 : 例27)
- (26) どうか今後も末永く、ご主人とともに当店の商品テストを続けていただきたいかと思います。(同 : 例28)

(23) のように話し手にとって命題内容が不確実な場合は推量として用いられ、(24) ~ (26) のように確実な場合は婉曲として用いられる。推量の場合は(23') のように「ト思ウ」を「カト思ウ」に置き換えることができる。一方、婉曲の場合は(24') は不自然であり、(25') (26') は置き換えられない。

- (23)' 「あいつ、大学、来てるかな」「はあ、来てるかかと思います。」

- (24)' ?戦後の正しい教育を受けた若者に正しい判断をしてもらわねばならないかと思います。
 (25)' *乾杯したいかと思います。
 (26)' *どうか今後も末永く、ご主人とともに当店の商品テストを続けていただきたいかと思
います。

婉曲における「カト思ウ」と「ト思ウ」の使用条件に違いが見られるのはなぜだろうか。本稿では「カ」の持つ不定性と、FTA に対する戦略という2つの要素が関係していると考え。まず1つ目の「カ」の持つ「不定性」について述べる。不定性は命題内容を1つに絞り切れておらず、他の命題内容の存在も否定しないことを表す。(25')の乾杯の挨拶において「乾杯する／乾杯しない」のような複数の命題内容を示したり、(26')の期待を込めてお願いする場面で「続けていただきたい／続けていただきたいくない」のような複数の命題内容を示したりすることは適切でない。ゆえに(25')(26')において不定性を持つ「カ」を用いると非文となる。一方、「ト思ウ」は話し手個人の思考内容であることを表す形式であり、そこで述べた命題内容しか想定しないため、(25)(26)は成立する。

次に2つ目のFTAに対する戦略について述べる。(25)は乾杯するという話し手の意思表明が見られるが、同時に聞き手にも乾杯を求めるという遂行要求の機能も持つ。また、(26)において商品テストを続けてほしいという聞き手への希望だけでなく依頼の機能も帯びている。(25)(26)はいずれも聞き手への働きかけが見られる場合であるが、話し手は聞き手のネガティブ・フェイスを侵害しないように婉曲的に「ト思ウ」を用いている。この相手に配慮を示す行為は、話し手自身のポジティブ・フェイス侵害回避にもつながっている。一方、(25')(26')において「カト思ウ」が使えないのは先述した「カ」が持つ不定性とも関係する。不定性を帯びたまま遂行要求や依頼をすることは、その行為自体がFTAとなる。この場合、いくら他のポライトネス・ストラテジーを使ったところで補償しきれず、対人関係に支障をきたす恐れがある。ゆえに「カト思ウ」は使えない。これに対し「ト思ウ」が使えるのは、「ト思ウ」は話し手の頭の中である事態が成立していることを表す形式であり、そこから遂行要求や依頼に発展したとしても対人関係上マイナスにはならないからであろう。

最後に、「カト思ウ」は使えるが「ト思ウ」は使いにくい場合について述べる。「カト思ウ」が婉曲的に用いられる例として、3.2で「お分かりいただけるか」と思います」のように相手の理解度に踏み込む場合や「一息ついている頃か」と思います」のように相手の状況に対してねぎらう場合を見た。このような聞き手の領域に関わる内容について話し手が自由に考え、それを他の命題内容の存在可能性の余地なく伝えることは聞き手のネガティブ・フェイスを侵害することになり、相手との関係性や場面によっては「ト思ウ」の使用に制限がかかる。

5. おわりに

本稿ではこれまで特に焦点が当てられてこなかった「カト思ウ」について認識のモダリティ形式として捉え、考察した。その結果、次のことが明らかになった。

- 1) 話し手にとって命題内容が不確実である場合は推量として用いられ、確実である場合は婉曲として用いられる。
- 2) 婉曲用法は命題内容によって誰のフェイスに配慮するかという対象が異なる。客観的な事柄や話し手自身について述べる場合、主に話し手のポジティブ・フェイス侵害を回避するために用

いられる。聞き手について述べる場合は、話し手のポジティブ・フェイスと聞き手のネガティブ・フェイスの両方への侵害を回避するために用いられる。

- 3) 「カ」が持つ不定性によって「カト思ウ」は1つの命題内容だけでなく、他の命題内容の存在も否定しないことを表す。相手が自分と異なる意見や認識を持つ可能性を否定しないことでフェイス侵害リスクを回避し、婉曲として機能している。

対人関係に配慮し、円滑なコミュニケーションを図ろうとするのは普遍的なことである。本稿ではそれが観察される1つの形式として「カト思ウ」を取り上げ、婉曲用法を中心に語用論の観点から考察した。

【参考文献】

- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universal in language usage*. Cambridge University Press [田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』 研究社]
國澤里美 (2014) 「現代日本語における『認識のモダリティ』—世代差が生じる要因—」 名古屋大学博士學位論文
佐竹秀雄 (1995) 「若者ことばとレトリック」 『日本語学』 14(12), pp.53-60
——— (1997) 「若者ことばと文法」 『日本語学』 16(4), pp.55-64
澤田治美 (1993) 『視点と主観性 —日英語助動詞の分析—』 ひつじ書房
滝浦真人 (2015) 「語用論がかかわる次元と日本語 —初めに間主観性があった、と言ってはならないか?—」 加藤重広編 『日本語語用論フォーラム』 1, pp.1-25, ひつじ書房
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』 くろしお出版
森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思ウ』をめぐって —文の意味としての主観性・客観性—」 『日本語学』 11(9), pp.105-116

【謝辞】

本稿は2019年3月9日に行われた「第1回日本語教育・文法研究会熊本大会」で口頭発表した内容を部分的に含んでいる。貴重なご助言をくださった方へ心からお礼申し上げます。